

信濃追分

文学譜

近藤富枝



濃追分文学譜

近藤富枝

中央公論社



信濃追分文学譜

一九九〇年四月一五月初版印刷
一九九〇年四月二五月初版發行

著者 近藤富枝

發行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

發行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二一三四

検印廃止

ISBN4-12-001922-5

©1990 Printed in Japan CHUOKORON-SHA, INC.

目次

華鬘の章 5

分去れの章 27

ゆふすげびとの章 61

夢のあとの章 101

「菜穂子」の章 141

黄菊散るの章 181

あとがき 220

主要参考資料 221

装画 高橋義治

装幀 中島かほる

本文写真 増山武久

信濃追分文学譜

華^け鬘^{まん}の章

去年の秋は信濃追分の紅葉を眺めたいと思いつながらとうとう見ることができなかつた。十月には何度かでかけ、庭の栗の木に実がたっぷりなっているのに驚いたり、すすきの穂の丹の色の美しさに息をのんだりしていたが、木々はまだ青くて、うるしも色変りしていなかつた。

「十一月のはじめでしたよ。すごい紅葉だった」

と近くの山荘に住む画家のSさんが、わたしの見なかつたことを残念がってくれた。

ちょうどそのころは忙しくて、スケジュール表をにらめても東京を脱出するだけのまとまつた時間が捻出できそうになかつたのである。

思いがけず追分に山の家を持ってまだ一年だが、その次第は全く夢のようなゆくたてであつた。ある日わたしは自分の卒業した学校の同窓会だよりを何げなく眺めていて、隅の方に公示の記事を発見した。

それは学校所有の追分寮の敷地の一部を分譲する。ただし応募者は本学の卒業生であること、家業が学者、著述業、弁護士、医師にかぎるといふのである。

瞬間、わたしはシャーロック・ホームズの『赤毛同盟』という探偵小説を思い出した。あまりに巧すぎる話で、わたしのためにこの記事が作られたのではないかとほんのちよつと疑つたくら

いである。なぜなら、もしわたしが柄にもなく第二ハウスを作るときがあるならば、それは追分以外には考えられないとかねて固く思っていたからだ。

しかし二区画の土地に、四十人もの同窓生が希望したと聞いたときは、わたしの自信もゆらいだ。しかも慢性忙し病のわたしは、このときも時間がなく、地所の現地見学にもいけず、抽選の日も欠席した。分譲希望の申し込みだけはしておいたから、前日になって事務局から、

「どうなさいますか。こちらで事務の者にくじをひかせてもよろしいでしょうか」

と電話がかかってきた。

「よろしくおねがいします」

とわたしは答え、それでも一縷の望みをつないでいた。

それがもののみごとに当選して、憧れの追分村民になる切符を獲得したのだから、これは生涯の快事といってよいだろう。

なぜこれほど追分に執着するのか、そのことはおいおい語ることにするが、とにかくわたしは、その場所にあわてて山小屋を作り村民一年生になった。そして夏の間を朝な夕なに浅間山を眺めてすごすことになったのである。煙をはく山というのは奇怪だなあと思いながら……。

もっとも、この浅間山はどこからでも見えるというわけにはいかず、家の前の道路に立つと、落葉松の並木の向うに、きげんのよいときはくつきりと威容をあらわしてくる。

とにかく二十数年前にはじめてきたころを思うと、追分の木はみな高くなって、浅間山を眺めるには不便になった。

村の旧事についてちょっと語ることにしよう。ここ追分の他に軽井沢と沓掛を加えて、浅間根腰の三宿といい、江戸時代は旅人の往還で股賑をきわめたところである。このうち沓掛はいま中軽井沢と名のるようになった。

なかで追分が一番繁昌していたというのは、中山道と北国街道の分岐点になっているため、旅人の数がとりわけ多いところに原因がある。

現代人のわたしたちにとっては、街道とか宿場とか本陣とかいっても、それはテレビドラマの牧歌的な画像としてより頭にうかんでこないけれども、当時諸大名の参勤交替は徳川幕府にとって重要な政策の一つとされていた。武士の力をそぎ、荒地の民を潤して恩を売るためである。

一年置きに出府する大名たちの行列は、勝手な道を行くことはできず、街道の混雑を平均化するために、道中奉行の手でコントロールされたという。だから薩摩や佐賀の殿様のように中山道を選んではずいぶん遠まわりになるはずの連中まで、追分に泊ることになった。

大名の行列というものは、多いものは千八百人ほどいたというので、狭い追分の宿がそのためはちぎれそうになり、ムンムン人の香でわきかえったようすが思われる。文久元年の記録によると、追分の宿場は長さ五丁四十二間で、本陣一、脇本陣二を筆頭に、四十四軒の宿屋がそのなかにひしめいていた。

この地は北国より雪は少いの、土地が高いため寒気がきびしく「五穀生ぜず、只稗、蕎麦のみ多し。又果の樹もなし。民家にも植木なし」と『木曾路名所図会』にも誌されているほどである。従って住民たちは街道をタネに暮しを立てていた。

「沓掛まで一里三町宿よし、出女あり、此間石高にて道わるし」

と前出の『木曾路名所図会』に追分について誌してあるが、出女というのはいわゆる飯盛女わしりおんなのことで、食売女とも書く。宿屋に年季奉公をして、旅人たちの寝間の相手をする女たちのことである。

「心よくても、追分女郎衆、浅間山から鬼が出る」

と追分節にもうたわれ、実は追分宿の繁栄は、彼女たちの存在のためといってもよいくらいであった。当時八百人余りの村人たちのうち女が断然多く、そのなかで二百人は飯盛であった。

彼女たちの客は旅人だけではなかった。近在の百姓の若者たちが、農閑のころには遊びにきた。夜家人の寝しずまったころ家を抜けてきて、朝早く戻り、なにくわぬ顔をして畑に出、そこでグーグー高いびきをかいて寝不足をとり戻す男もいたそうだ。

なかでも脇本陣の油屋が一番栄え、間口二十間、建坪は三百五十坪、その他蔵や離れなどが丘状の斜面に奥へ奥へと立ちならんでいた。客用の小間は五十四室あり、飯盛女も四十人雇っている。台所で用意する食事は毎回百人前、いつもごたごたしているので、縁もゆかりもない通行人がまぎれこんで勝手に食事をしているも、誰もそれときづかなかったほどだったという。

抱えの女四十人という、花のお江戸の吉原でも大店格おみせである。そして追分の飯盛にも芸達者がいた。新潟や金沢、名古屋辺りまで、芸がよくきりょうよしの奉公人をさがしにいったため、油屋の手代が新潟に出張して妓きさがしをしている記録が残っている。追分が男たちのオアシスであったのは、そうした宿屋側の商売熱心によるだろう。

身代金は吉原などに比べるとはるかに安く二、三十両くらいで、幼い者の売買は一両とか二兩にすぎず、みな親の貧しさのため苦界がに身を沈める者ばかりであった。

彼女たちの身なりは絹ものは禁制で、

「黒木綿の紋付の布子、桃色木綿の裏ふき二寸ばかり出したるを着て、花色太織の幅せまき帯をしめ、煙管を手に持ちながら出てくる。下着は三つ四つ着た様に見ゆれども、皆襟ばかりとじつけたものにて胴より下は綿入れ一つなり、是此所の風俗なり」

と江戸安永のころに大田南畝（蜀山人）の書いたものに見えるが、これは二十四、五歳の輕井沢宿の飯盛の風俗である。追分も多分こんなであったろう。下着は比翼仕立にせよ、三枚も四枚も重ねるように見せたのは、飯盛もなかなか伊達を競ったことが知られる。

吉原の女郎に比べて一層哀れなのは、客の大方が旅人で、文字通りの一夜妻であることだ。

「送りましょかい送られましょか、せめて榊形の茶屋までも」

という歌があるように、女たちは一夜明けると宿場の出口にある榊形の茶屋まで客を送り、ここで別れの盃をかわしてなごりを惜しんだりした。

榊形の茶屋は、いまでも一軒つがる屋というのが往時のままの姿で残っている。眺めるたびに、長谷川伸の「一本刀土俵入り」の舞台面を思い出してしまふ。舞台の我孫子屋はこのつがる屋をモデルに装置家がデザインしたのではなからうか。いまにもつがる屋の戸を開けて、白粉焼のした肌の女が、縞木綿のきものをしどけなく着てあらわれるように思い、深い軒を支える出桁のおもしろい形にみとれるふりをしてしばしたらずんだりするのだ。

昔、榊形の茶屋は一軒ではなく、十数軒も並んでいた。ここは宿場の出入口に当り、一種の交通規制の役割をしていたので、街道を鉤の手に曲げ、宿内が見とおせないような気くばりがされていた。



枡形の茶屋，つがる屋

客と飯盛女との待合所であるだけでなく、宿の社交場といった趣もあり、十返舎一九の『金の草鞋』には軽井沢枳形で曲芸をしているのを見物している旅人や飯盛たちのようすが、描かれている。

一方、客に殺された飯盛、むごい抱え主のもとで泣く飯盛、悲恋に苦しむ飯盛など、彼女たちの哀話はつきない。なかでも布袋屋の飯盛であった吉野大夫の悲運は一しお悲しい。

吉野大夫といえは島原の名妓が有名で、その二代目は灰屋紹益という豪商の本妻におさまった。類い才女だったことで、吉野の名を後の世までとどろかしたのであった。彼女は元和寛永のころのひとである。

さて、追分の吉野大夫は享保ごろのひとともいわれるが、明確ではなく、大体飯盛に大夫という位などあるはずはないのだ。ただ追分でも源氏名だけはいつからかつける習慣となり、初音とか雛町とかやさしい名をつけることを喜んでた。

追分の吉野はそのひとが鄙にはまねな品格のある美女であったので、いつか大夫とあがめられたのでもあろうか。しかも彼女は朝御影用水に入って冷くなっているのが村人たちによって発見された。

死の理由は何だったのか。隠れキリシタンがあらわれたからとも、抱え主から虐待されたためとも伝えられる。ともあれ二十二、三の盛りの娼妓が、扇屋染の帯をしどけなく半解きにして白い顔に少し泥などつけて倒れている姿は凄惨でもあり哀れでもあり、美しくもあつたらう。

吉野の死んでいた辺りの地を吉野坂といまいうが、ここにかぎらず追分の土には飯盛たちの涙が道にも丘にも水車小屋にも、しみこんでいると思わねばならない。

手許に明治の末の追分を撮った絵はがきがあるが、いまにも崩れそうな古家が、それもところどころ歯でも抜けたように空地をまじえ、うねった街道に沿って並んでいる。屋根は板葺で石を置き、庇はかしぎ、破目板は修繕のあとがある。手前の一軒は軒に薪など積んでいるところを見ると人が住んでゐるらしいが、次の家は入口も閉ざし空家ではないかと思われる。

さしも賑やかであつた追分がこのようにすっかりさびれるのは、御一新になり（追分の古老たちは維新とはいわず御一新といまだに古風にいう）参勤交替の制がなくなつたため街道の往来が急激にへつたので、これに追いつちをかけたのが、明治五年に新政府が出した「娼妓解放令」だつた。

そのため追分の飯盛が廃業に追いこまれたのだが、これは追分だけの問題ではなかつた。日本全国に娼妓たちの廃止が実施されたので、吉原も一度は潰滅の憂目にあつてゐる。しかし一年余りのちに妓楼は貸座敷として復活し、娼妓たちも戻つて、吉原はもとの不夜城にかへつた。

しかし追分は昔の繁栄をとり戻すことはできなかつた。娼妓への禁令はゆるんでも、参勤交替消滅は手の施しようがなく、その上明治二十一年には鉄道が通じ、それも追分の宿しゆくははずれて駅ができたから、いよいよさびれる原因はふえていくばかりだつた。

「とにかく村人たちは現金収入が何もなく、地価もないところですから売ることもできません。殿さまだけを泊めていた本陣がまずダメになり、旅人を泊めていた脇本陣もつづいて苦しくなり、やがて油屋は軽井沢駅の前で旅館兼弁当屋を開きました」

と現在油屋旅館の主である小川貢さんがインタビューにこたえて語つてくれた。売れるものは何でも売つたらしい。油屋の脇本陣のりっぱな門も、さるお寺におさまつた。門は売れたが、家

は買うひとがない。そのため風格のある二尺ほど二階のつき出たがっちりした出格子のある母屋は助かった。こうして油屋は昭和十二年の火災まで、なつかしいほろびの歌をかなでながら街道にたたずんでいて、多くの文学者たちの心をひきつけることになったのである。

いま分家である小川貢さんの経営する油屋旅館は、浅間神社から分去れわかきへ向っていく右側にあるが、これは火災後の復興の折に定まった位置で、昔の油屋は反対側にあった。

小川貢さんに別れを告げて「話に聞いた昔の油屋はこの辺かしらん」と茫々の広い草地を眺めていると、まるで地から湧いたのかと思うような品のよい白髪の老女が目の前に立っている。

背も高い。色白で高砂の姥おばを思わせる。したたる緑のなかで、そのひとは陽炎かげろうの作る幻覚かもしれないと、わたしはあわてて目をこらした。

「はい、さようでございます。ここが昔の油屋のあとで、どうぞゆっくりごらん下さいまし」きれいな標準語でこたえてくれた。案内されてゆるやかな勾配をあがり、焼け残った隠居所をまずみせてもらう。むかし屋敷神であったお稻荷さんもあった。

白樺、もみじ、ならなどの若葉に包まれて、崩れかかったそれらの建物は、つよい太陽の日ざしに耐えられないように見える。キシキシと小さな悲鳴をあげながら、やっと立っている。

老婦人は身ごなしが軽く、ひよいひよいと、歩きにくいゴロゴロの石道を飛ぶように行く。白い蝶が裾にまといつくように、ヒラヒラあとになり先になりしているのも楽しい風景である。

この女人こそ、明治三十七年に油屋本家の長女として、この場所で生れた小出かつさんであった。

インタビュ어의申しこみもしないのに、わたしは思いがけない幸運にぶつかったことになる。